

らい病人シモンの家の香り

マタイによる福音書 26:6-13

賈 晶淳

本日の聖書は受難週に読まれる箇所から選びました。ベタニアに住んでいるシモンという人の家での話です。過越祭の期間中はエルサレム神殿への巡礼者が最も多く町は混みあいます。イエスの一行はエルサレムから近い村ベタニアに泊まり、毎日城内へ通っていたと思います。話はある日シモンの家で弟子たちと共に食事をしていたイエスに、一人の女性が近寄り、用意してきた高価な香油をイエスの頭に注ぎかけることで始まります。

シモンはイエスの他に名前が記されている唯一の人で、6節のところに「重い皮膚病の人」と紹介されています。この「重い皮膚病」とは現在も議論が続いている訳語です。『口語訳聖書』では全てが「らい病」に、『新共同訳聖書』初版では「らい病」と訳されていたのを途中から「重い皮膚病」に替えています。この改訂には1996年に廃止された「らい予防法」の影響があったと思います。議論の結論が出ていない所為か2018年に出された『聖書協会共同訳聖書』では「規定の病」となっています。この「規定の病」という訳語は国語辞典にも記載はなく、言葉の意味も明確に定義されないまま、レビ記13章の見出しとして「新共同訳」では「皮膚病」であったものが「聖書協会共同訳」では「規定の病」に改訂され、章の中では祭司が判断する「皮膚病」と「重い皮膚病」の全てが「規定の病」に替えられているのです。

この「規定の病」という訳語はレビ記を読めば皮膚病の一種であることが分かりますが、単独で出る箇所(出エジプト 4:6 他多数)では理解が極めて困難です。これまで多くの人の脳裏に隔離と差別の象徴として苦しい記憶を残してきた「らい病」が、「規定の病」に替えられたことで私たちにどのようなリアリティを持たせるのでしょうか。参考までに「重い皮膚病」や「規定の病」については各聖書の後ろの付録の「用語解説」に説明があります。今回個人的には「重い皮膚病」も「規定の病」も納得できないこともあり、証詞の題には「らい病人」のままにしました。

並行箇所であるマルコ 14:3-5、ヨハネ 12:1-8 をあわせて読みますと、マルコがほぼ同一の内容でヨハネは大きく違っています。先ず、食事をする家がマタイではらい病人シモンの家ですが、ヨハネではイエスが死人から蘇らせたラザロ(ヨハネ 11章)とその姉妹マルタとマリアの家になっています。今回面白い発見をしたのは、この「らい病」、或いは「重い皮膚病」や「規定の病」という訳語が共観福音書では何度も出ているのにヨハネでは一度も出ていないということです。即ち、ヨハネではこの病の人や物語は存在しないということです。ヨハネが共観福音書より編集時期が遅い事から意図的とも考えられますが、マタイのらい病人シモンの家がヨハネのラザロ、マルタ、マリアの家に替えられていることにも関連があるでしょう。

そして、マタイでは名もない女性がイエスに香油を注ぐ話を中心ですが、ヨハネではマルタが食事の支度をし、ラザロはイエスと共に食卓に座っていて、マリアがナルドの香油をイエスの足に注ぎ、その足を自分の髪で拭うという形で細かく描かれています。そして、マリアの行為に対する批判者としてのイスカリオテのユダまで全ての登場人物の名前を記しています。

古代から近世までらい病だけでなく皮膚の病は、外見からすぐわかるので何時、何処の社会でも隔離され、遠ざけられてきました。その偏見と差別と無知は、現在でも福島原発事故後の放射能汚染やコロナウイルスのように、目に見えないものまでもその対象としています。このような事実からもマタイがらい病人シモンの家と言いながらも、関連する意識や表現を書き残していなかったことには、不思議な気がするのと同時に幸いなこととも思いました。ヨハネではどうしてらい病人シモンの存在が消され、

らい病に関する全ての内容が消えているのでしょうか。

イエスに香油を注ぐ場面ではヨハネではマリアがその役を担っていますが、マタイでは一人の女になっています。この女性にも名前があったと思います。しかし、マタイはその名を記していません。ヨハネのようにこの話と関連するすべての人の名前を明記するのは具体的で良いと思いますが、聖書を始め歴史の中には名を残さなくてもその行為が記されている話が数多くあります。マタイは名もない男性ではなく女性へのイエスの言葉を書き残しています。10 節では「わたしに良いことをしてくれたのだ」とほめ、13 節では「はっきり言うておく。世界中どこでも、この福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう」と言い、世に行為だけで名を残していない全ての人々への福音と思われる内容です。このようなイエスの言葉はヨハネには出ていません。

最後にシモンの家の香りについて考えたいと思います。全ての並行箇所がイエスに高価な香油を注いだことは一致しています。高価な香油でしたのでとても良い香りだったと思います。マタイとは違って、ヨハネではその香りが「家は香油の香りでいっぱいになった」(12:3)と記しています。きっとその香りは食べ物や全ての匂いを消臭できる強い香りだったと思います。理由は三つの福音書が一致するもう一つの内容で、その行為が死の準備のためであるということです(マタイ 26:12、ヨハネ 2:7)。線香もそうですが、香油を死者の体に塗るとするのはその香りが長持ち出来ることと同時に消臭効果があるためです。体臭の強い人が強い香水を使っているのと同じです。

ここでも違いがあって、マタイにはこの家の香りのことが何にも記されていないのです。勿論、シモンの家も香りであらうと思います。しかし、マタイは何故香りのことを記さなかったのでしょうか。これはあくまでも想像ですが、マタイは鼻で嗅ぐ人工的な香りに優るある大切なことを書き残したかったのではないのでしょうか。それはもしかすると鼻ではなく心で嗅ぐ香り、感動と涙で感じる香りではないかと。名も知られていないこの女性はマリアのようなホストの家庭の一員でもなく、はるばる遠いガリラヤからイエスについて来ましたが、晩餐会には招待もされていない人であつたでしょう。イエスに従い、その教えを聞いていた彼女は、何時からかイエスとの遠くない別れを感じ、そのための香油を用意してきました。この時が彼女としては香油を使える最後のチャンスだと思ったでしょう。

マタイにとってこの日の本当の香りは、香油より彼女そのものであつたと思ったのでしょうか。らい病人シモンもこの香りの持ち主だったと思います。元は貧しい弟子集団であつたため、高価な香油を無駄使いするのを批判していた弟子たちもこの香りの所有者だったと思います。勿論イエスには人々のためにご自分を犠牲とする救いの香り(エフェソ 5:2)があります。

この話を通してマタイは私たちに心で感じる良き香りについて教えているような気がします。女性の香油を注ぐ行為によって、らい病人シモンの家での食事会はイエスの生前葬となりました。マタイとマルコではらい病人シモンの家の香りは心温かい人々から発せられる本物の香りで、互いに支えあう良き香りであることを私たちに伝えようとしたのではないかと思うのです。

(2014年3月3日証詞より)